

## 幼稚園での経験に関する3歳児と母親の会話(1)

— 幼児期の「自己の構成」の観点からみた会話内容の特徴について —

○小松 孝至  
(大阪教育大学)

野口 隆子  
(お茶の水女子大学大学院)

《問題と目的》経験に関する語り(personal narrative)は、個人がその経験を組織化し、「自己を構成する」場として注目されている。幼児期においても、母親などと共同で自らの経験や行為を語ることが、自己を捉えなおし、自己を語ることがを身につけていく社会的実践として考えられている(Miller, 1994)。

この、幼児が経験を語る場面は、日常生活の至るところに存在すると考えられる。しかし、それを積極的にとらえる研究が行われてきたとはいえない。そこで本研究では、園と家庭という異なる生活空間のいわば接点において生じる、幼稚園での経験に関する母子の会話場面に着目した。そして、会話そのものの特徴、および母親がこの会話に対して持つ信念という二側面から検討を加えた。

まず、本発表では、母子の会話の録音記録を、子どもの「自己の構成」に着目しつつ分析し、会話を持つ機能を考察する。

《方法》調査協力者：都内の私立幼稚園3歳児クラスに通園する園児(M=6, F=1, 入園時の月齢は3歳1ヶ月~3歳10ヶ月)とその母親。

調査方法：調査時期は2000年5月~7月。4組の母子については2回、3組については1回の録音を行った。録音にあたっては、降園時、園内の一室に母子を案内し、自由に会話をしてもらった。ただし、園で子どもが経験した遊びと、経験の中で楽しかったことの2点については、会話の中でできるだけ触れるよう依頼した。

《結果》録音された相互作用のうち、園での経験についての会話がなされた部分を特定し、分析の対象とした。園での経験に関する会話を含んで展開された相互作用は、最短で2分23秒、最長で15分20秒であった。

分析にあたっては、子ども自身を捉える重要な枠組みが示されていると思われる部分を取り上げ、それが持ちうる機能を積極的に解釈した。その結果から、以下の2点を報告する。

### a. 連続した存在としての子どもへの着目

母親が、従来(「いつも」)の子どもの姿と、会話当日の子どもの経験を結びつけたり対比したり

する表現がみられた。特に遊び等の好みや行動についてこのような対比がなされている(事例1)。

事例1 対比・結び付けの例(下線部)

母	ゆうちゃんは さあ ねえ いつも なにして あそんでるの？
子	うんとお すなあそびと でんしゃ
母	あの いつも きにいった あれは やってないの じゃんぐるじむじゃ なくて [なんだっけ つりばし [じゃんぐるじむ
子	つりばしも やってるよ
母	すごい おきにいり だったじゃない やらないの？ さいきん

母親は、園生活の中での特定の経験を取り上げるに際して、それを子どもの好みや今までによく見られた行為と対比したり結びつけたりすることで、空間・時間を超えて連続的な面を持つ子ども像を構成していると考えられる。

このような表現は絶対数も少なく、全く見られない母子もあった。しかし、連続した存在としての子どもに着目する観点が母親の側にあることは、母親へのインタビュー(一連発表(2))においても示唆されている。

### b. 他者との関係付けと対比

Miller, Mintz, Hoogstra, Fung & Potts (1992)が述べるように、経験に関する語りの中での「自己の構成」は、その過程だけでなく構成される内容も「関係的」なものである。今回の会話においても、幼児が園で出会う他者との関係が多く言及されていた。特に多かったのは、「一緒に遊ぶ」「何かをしてもらおう」という表現であり、前者は主に仲間との関係について、後者は主に保育者との関係について述べるものであった。これは、Miller et al.(1992)の結果に対応するものであり、会話の中で、他者との関係の記述として多用されるものであることがわかる。また、1組の母子では、兄や友だちと対比しつつ、子どもの経験や特徴が述べられるという会話もみられた。

以上、a・b二つの特徴は、幼稚園での経験に関する会話において、「子ども自身の連続性」と「他者との関係」という少なくとも2つの視点から子どもが捉えられていることを示唆している。今後、これらの特徴に関する個人差、発達的变化などに着目しつつ、詳しく検討することが必要であろう。